

## 「宇都宮空襲」

関口喜美子

米軍の空襲は、徐々に地方都市へと狙いをつけてきた。この目的とは、地方の軍事工場と相俟って一般の民家を大量に焼失することで、日本国民の戦意を失墜させることだった。宇都宮もいよいよ昭和20年7月12日、B29の襲来で爆破された。空襲のあった夜は、姉と二人きりだった。父は勤務先、母と弟は田舎の知人宅に疎開していた。

あの7月12日の夜、ラジオは珍しく甘い声で歌う灰田勝彦の「新雪」という曲を流していた。当時のラジオ放送は、警戒、空襲警報発令情報と時局ニュース、軍歌が主体となっていたので、初めて耳にしたその爽やかな曲に感動した。その心地よさを胸にして眠りに就いた2時間後、「ウーウーウー」という警戒警報のサイレンとほぼ同時に、縁側のガラス戸がオレンジ色に光った。

当時は時局がら、昼も夜も作業着姿で通していたため、すぐに跳び起き、枕元に備えておいた頭巾と雑のうを肩にかけ外に出た。

道路は、各家々から飛び出してきた人でいっぱいだった。私と姉

はぞろぞろと無言で歩く人達に混じって歩いた。

その避難<sup>ひなん</sup>していく最中、「ヒュウッ、ヒュウッ」とまるで大きな口笛のような不気味<sup>ぶきみ</sup>な音が頭上をかすめる。この音の正体は戦後わかったのだが、実は焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が落下する時、それについているリボンの火が風を切る音だったという。あの何とも言えない不気味<sup>ぶきみ</sup>な音は、今もなお耳に残っている。

とにかく、私達が逃げ<sup>に</sup>ていく途中<sup>とちゅう</sup>に焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が落ちてこなかったことは、なによりの幸運だった。逃げ<sup>に</sup>て逃げ<sup>に</sup>て辿<sup>たど</sup>り着いたのは、現在の聖山公園墓地である。当時、あの場所は小高い草木<sup>しげ</sup>の茂<sup>おか</sup>った丘であった。市民の避難<sup>ひなん</sup>場所の一つとして決められていたらしい。

避難<sup>ひなん</sup>してきた多勢の中には赤ちゃんもいたようで、「泣かすな、敵<sup>ねら</sup>に狙<sup>ねら</sup>われるぞ」と怒鳴<sup>どな</sup>ってる人がいたが、何とも重苦しい雰囲気につつまれていた。

小高い台地から見る東の空は、しばらく赤く染まっていたが、やがて夜明けが近づくにつれて空の赤味もうすれ、人々は帰り始めた。私と姉も、またその群に入り、家へと向かった。

家に着くと、父が待っていてくれた。父の話によると、私達を案内<sup>もど</sup>じて家に戻<sup>もど</sup>った時、同時に焼夷弾<sup>しょういだん</sup>が二発落下。一発は玄関前<sup>げんかん</sup>の庭<sup>つ</sup>に突

きさきり不発。もう一発は、屋根を突き破り縁側を抜けたが、これまた幸いなことに縁の下えんの土にもぐり込んでくれたので、縁側の板が少々焼けただけで大事には至らなかった。

ところが、一軒隣のご主人は、同じ時、焼夷弾の直撃を受けて即死、家も全焼という悲劇に遭ってしまった。私達と一緒に避難した奥さん、小さな娘さんの嘆きは、計り知れないものだったろう。

7月12日の空襲で全焼した小学校は、私の母校である西小学校、東小学校、築瀬小学校の3校である。

空襲は、国鉄駅周辺から始まり、下町地域はたちまち炎に包まれた。そのため、西小学校の焼死児童1名に対し、東小学校では、何と24名の児童がその犠牲となってしまったのだ。

ちなみに、学校別の死亡児童数を見ると、東校24名、築瀬校21名、中央校7名、西原校3名、戸祭校と今泉校が2名、西校と昭和校が1名、合計61名という痛ましい数である。

そして死亡児童を多く出してしまった東小学校の校庭は、空襲翌日から遺体安置所となったので、多勢の人達は変わり果てた遺体にとりすがって泣き叫び、凄惨、地獄のような光景だったという。

私達の学校（旧県立宇都宮第一高等女学校）現宇都宮女子高等学

校の犠<sup>ぎ</sup>牲<sup>せい</sup>者は4名、しかしその中の2人は、私と同じ学年の友人だ。  
前日まで、同じ校舎の学校工場の中で作業していたのに。今でも亡<sup>な</sup>き彼女<sup>かのじよ</sup>の面影<sup>おもかげ</sup>が脳裏を過ぎる。

ここで宇都宮<sup>くうしゅう</sup>空襲<sup>くうしゅう</sup>について、もう少し説明を加えたい。

7月12日(木)11時19分、111機のB29爆撃機<sup>ばくげき</sup>が襲来<sup>しゅうらい</sup>、  
806トンの焼夷弾<sup>しょういだん</sup>を市内めがけて落とした。そして市街地の6割  
近くを焼き<sup>つ</sup>尽くした。さらに、死者620名以上、家屋焼失者47,  
960名を出したのである。

当時、宇都宮市の人口は9万余人であったので、半数以上の人が  
罹災<sup>りさい</sup>したことになる。

しかし、宇都宮<sup>くうしゅう</sup>の空襲<sup>くうしゅう</sup>はこれだけではない。その後も爆弾投下<sup>ばくだん</sup>に  
遭<sup>あ</sup>い、死者が出ていたのである。その他、機銃掃射<sup>きじゅうそうしゃ</sup>という恐るべき  
攻撃があったのだ。それはP51というアメリカの戦闘機<sup>せんとうき</sup>が超低空<sup>ちよう</sup>  
で飛行し、地上の人々をまるでなぎ払<sup>はら</sup>うように、一人一人を目がけ  
て機関銃<sup>きかんじゅう</sup>を打ちまくるのだ。「バリ、バリ、バリ、カタ、カタ、カ  
タ」という銃声<sup>じゅうせい</sup>は、未だに耳から離れない。防空壕<sup>ぼうくうごう</sup>の中に身を隠<sup>かく</sup>し、  
敵機が早く去りますようにと、恐怖<sup>きょうふ</sup>に震えながら祈<sup>いの</sup>るのみだった。

しかし、この機銃掃射<sup>きじゅうそうしゃ</sup>はまたしても、市内男子中学生6名を犠<sup>ぎ</sup>牲<sup>せい</sup>に

したのである。この中の一人は、全焼した<sup>やなせ</sup>築瀬小学校で焼け跡<sup>あと</sup>の片付けをしていた中学生（現在の宇高生）、そしてあとの5人は、焼けた日清製粉会社で金属回収をしていた下野中学生（現在の作新学院高校生）であった。なくなった中学生は、命を落とす直前まで、教師や多数の友人と<sup>いっしょ</sup>一緒に仕事をしていたのに…。

ましてこの日は7月28日、8月の終戦を目の前にしての何とも痛ましい<sup>ぎせいしゃ</sup>犠牲者であった。

宇都宮大空<sup>くうしゅう</sup>襲の翌日から、私達の学校にある記念館という建物が特別救護所となり、負傷者がたくさん運びこまれてきた。しかし、<sup>いりょうひん とぼ</sup>医療品に乏しく、ここで命を落とした人もかなりいたと聞いている。

救護所の周りには、血に染まった包帯が無数に干してあったが、あれは物資不足だったため、何回も洗い直して使っていたのだろう。手当を受ける人、手当をする人、<sup>たが</sup>お互いに<sup>つら</sup>きぞ辛いことだったと思う。

<sup>くうしゅう</sup>空襲から三日後に登校し、校長から、本校生徒の<sup>りさいじょうきょう</sup>罹災状況等について話を聞いた。

前にも述べた通り、生徒で焼死された者は4名、負傷した者5名、家族が焼死した者18名、<sup>りさい</sup>罹災した生徒は418名ということであ

った。

この報告の後、例によって「戦争には断固として立ち向かい、  
愛国精神に則って立派に働くべし」との校長訓話を受けた。集会後  
は、再び学校工場の仕事に入った。

しかし、もうこの頃ころから仕事がめっきり減って来た。主要都市は  
壊滅かいめつ状態になり、もはや工場には飛行機や船を造る資材が無くなっ  
ていたのであろう。工場から来ていた指導員は飛行機おおの前方を被う  
風防すという透き通った強固なガラスのようなもので、何か小さな細  
工物すをしていた。今思うとあれはブローチだったのかなあと、かす  
かな記憶きおくが残る。作業はそれほど暇ひまになっていたのだ。

しかし、そうしている間にも警報のサイレンは鳴り、その度に私  
たちは防空壕ぼうくうごうにかけこむ。

暗い壕ごうの中で、東京から疎開そかいしてきた快活な友人が「もし、ここ  
に爆弾ばくだんが落ちたって、死ぬ時はみんな一緒いっしょだから平気、平気」なん  
て言って明るく振る舞ふっていた。

彼女の言葉かのじょに作り笑あいつちいの相槌あいつちをしながら、ひたすら警報解除を待  
っていたのだ。